

2S64 遺伝子組換え作物の環境安全性試験

北海道大学農学研究科 大澤勝次

遺伝子組換え作物から収穫された食材が、アメリカやカナダから輸入されるようになって4年になる。昨年の秋以来、農林水産省や厚生省が「2001年4月から遺伝子組換え食品の表示を義務化する」方針を示し、それを機に再び活発な安全性論争が起きている。

この10余年間、遺伝子組換え技術の開発に携わり、21世紀の日本農業の革新に不可欠な技術であるとの信念から、我が国独自の組換え作物の開発に取り組んできた筆者ら(筆者は本年3月31日まで農林水産省の研究者であった)は、現在のマスコミを媒体にした組換え食品や組換え技術への誤解と錯覚の拡大に懸念を抱いている。

そこで、この機会に、筆者自らが担当の一員として関わった「コートタンパク質遺伝子を導入して育成したキュウリモザイクウイルス病抵抗性メロン」及び、「キチナーゼ遺伝子を導入して育成した灰色カビ病抵抗性キュウリ」を用いた環境安全性試験の具体的データを示しながら、一般的に組換え作物の環境安全性や食品としての安全性がどのように判定されるのかについて話したいと思う。私たち一人一人の存在はもちろんのこと、すべての生物の活動は環境への影響と関与を伴っており、むしろ、生物の存在そのものが「環境」なのだと考えられる。だから、「環境安全性試験」は「遺伝子組換えで誕生した新品種」の環境への影響の予測情報なのだ。

そのような事実をふまえて、ここでは、これまでの組換え作物の環境安全性試験の体験を通して、「環境への負荷」の判定にはどんな基準が必要かについての筆者の考えを示し、新たな論議とご批判を受けたいと思う。

Environmental Risk Evaluation in favor of the Genetically Modified Crops

Dr. Katsuji Oosawa

Graduate School of Agriculture, Hokkaido University

Key ward; environmental risk evaluation, GM (genetically modified) crops,
transgenic melon, transgenic cucumber